

基調論説



## 「今日の授業」が「未来の教育」を創る — 足元と遠くを観る眼と教師の主体性を —

大阪大谷大学 教育学部教授 今宮 信吾

【はじめに】

教員免許更新制度の廃止に伴って、各教育委員会員の研修制度の在り方が問われている。働き方改革と同時に進んでいることもあり、時間設定や研修内容の在り方も再度見直しが図られることになるだろう。ここでたちどまって皆様に考えていただきたいことは、時間や業務の忙しさを変えることだけが本当の働き方改革なのかという点である。私は、何よりも今こそ教師に求められるのは教師としてのやりがいではないかと思う。教員養成を担う立場にいる者として、教員不足を憂いている。こんなに素晴らしい職業であるのに、背中を向ける人たちが多くなることは残念である。この国の教育はどうなるかと心配になる。研修制度を充実させることで先生方にも感じてもらいたいことは、「教える」ということ「育む」ということは自分も楽しくなるということだという姿勢である。

【かけがえない自分である】

学生たちに常に語っていることがある。「コロナ感染や世界情勢など、いろんな状況で毎日很辛苦と思うようなことはあるが、希望を語れるのが教師の仕事だから、こんな素敵な

ことはない。希望の上に感動を掲載できなかったら、そんな自分をきつと大好きになると思う。」学生たちは、先生になるうとして一生懸命で、本当に真面目である。その反面、失敗や他人と違うことを恐れる傾向にもある。子どもたちの自尊心が低くなっていると言われて久しいが、教師をめざす大学生も同じ傾向にある。「この世の中には自分という存在は2人いないんだから、自分らしくいることを恐れては駄目だよ。子どもたちにとってかけがえない自分を創っていく過程を楽しもう。」と話すと、少し楽になったような表情をする。先生方にも同じメッセージをお送りしたい。教師になろうと決めた時、教師として初めて教壇に立った時、きつと理想の教師像があったはずである。研修ではそのことを感じ取ってもらいたい。

【新しい学びの方向性】

コロナ禍がまだまだ続き、ウイズコロナの中での教育が今後も展開するだろう。急速なICT活用の波に飲まれそうになりながらも、歩みを止めずに授業研究に取り組みされている学校が多い。どの学校も新しい教育の方向性を示す「中央教育審議会答申」に沿った教育を展開し

ようとしている。特に「個別最適な学び」と「協働的な学び」には重点をおいて取り組んでいる。地域に根ざした学校を目指して、カリキュラム・マネジメントにも力を注いでいる。

私はこのカリキュラム・マネジメントに期待を寄せている。学習指導要領に沿いながらも、学校独自の教育を展開していこうとする先生方を応援したいと思っている。教科書や指導書だけを頼りに毎日をやり過ごす教育ではなく、創作物としての「授業」を創り上げる過程を楽しんでほしい。学校への指導助言も授業参観をさせていただいた後に、子どもたちの変容をとらえて話し合う、そんな時間を先生たちと共有させていただいてほしい。教員養成に携わる者としてのOJT(オンザジョブトレーニング)である。現場にいた時よりもより俯瞰的な眼を持って指導助言に当たっている。いわゆる「鳥の目」である。先生方も時々遠くを観る練習をしてほしい。

【主体的な教師を育てる】

中央教育審議会には教員養成部会というものがある。子どもたちに主体性を求める以上、教師にも個性や最適さを求めるのは当然のことである。一番最近の会議資料には次のようなことが書かれている。

「実現すべき教師の姿」

- ・環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続けている
- ・子供一人一人の学びを最大限に引き出す役割を果たしている
- ・子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている
- ・教師が創造的で魅力ある仕事であることが再

認識され、教師自身も志気を高め、誇りを持って働くことができる。

・新たな教師の学び（主体的な姿勢、継続的・個別最適・協働的な学び）

このことに続けて、教師集団のことが述べられていて、「教職員集団の多様性が必要」だということも述べられている。子どもたちの個性が多様であるように、教師の個性も多様であっていい。当たり前のように思うことだが、これとは逆の方向性を求めて、職員集団に統制のみを求めたことはあったように思う。統制と多様性の両方を求めていくことがこれからの研修のあり方でもある。

大学で模擬授業を行っていてここ数年首をかしげあることがある。それは国語科の音読の際に、九割以上の学生が「丸読み」といわれる、句点で交代しながら読む方法を取る。「どうして丸読みばかりなんかな」と問うと、「私たちが受けてきた国語科の授業では丸読みでした。」と答える。気付くのが遅かったが当たり前のことだが、皆様が今日子どもたちと営んできた授業が、未来の教育を創るのである。未来の教育が多様性に満ち主体的であることを願う。

#### 【学校と子どもと研究を宣伝する】

私立の小学校、大学に勤めた経験から公立学校に対して思うことはHPの活用の仕方である。もつと積極的に活用する方法を勧めたい。そして、そのことが研修の在り方を変えることにもつながる。

まず、研究テーマを設定して研究・研修に取り組む学校がほとんどであるのに、研究テーマがHPから読み取れない学校がある。研究テーマをHPに掲載することは、いくつかの点において有益であり、研究に対するモチベーションを

高める効果がある。一つには、保護者への啓発と協力という最大限の効果が得られることである。その上で子どもたちにも研究テーマを自覚することに、「先生たちは私たちにこんな子どもに育ってほしいと願ってくれているんだな」という相互理解も進むだろう。個人情報保護の点から写真の掲載が難しいなら、先生と子どもたちとのやりとりだけでも文字化して載せていきたい。

また、子どもたちの発信の場としても絶好の場である。カリキュラム・マネジメントによって、単元学習が展開され、相手意識・目的意識を持った様々な発信活動が展開されている。それを学校内の掲示のみに留めておくのは教育のダイナミクスを失う。ここでもおそらく個人情報保護が優先されるのであろうが、IDとPWをかけながら、少しでも展開できないだろうか。そのことによって子どもたちの主体性も高まり、子どもの高まりと同じように、教師の研修意欲も高まる。教師の研修は自分の学校を好きになることから始まる。それは愛校心などという幅の狭いものではなく、ここで働いてよかったという働き甲斐にも通じる。

#### 【研究テーマを心に秘めて】

コロナ禍で失いかけているものに、人と人とのつながりがある。遠隔での授業が増え、出会う必要性を感じなくなることもある。しかし、学校という場は直接人と人が出会い、その出会いを活かす場だということを再認識したい。足し算や小数ではない掛け算のように、人と出会うことによって、自分が高まり、深まる。学校がそんな場であることを願って、多くの学校の研究テーマが「高め合い」「学び合い」となっている。そのことを子どもも像として実現し

ていってほしい。尼崎市内の学校がそうなることを切に願う。

#### 【おわりに】

今でも時々、小学校学級担任をしていた頃の夢を見ることがある。いつも何かに追われながら、「間に合うかな」「失敗したかな」と不安な思いで目が覚める。起きてすぐにはその思いが抜けないでいるが、我に返ってみたら、すでに小学校教員としての自分ではない今の自分に戻る。

振り返ってみると、順風満帆な日々ばかりではなかった。毎日が曇り空の中で過ごすようなもので、時折訪れる晴れ間を子どもたちが創り出してくれる喜びに、また次の自分を探しながら前へと進んで来たように思う。迷ったり、困ったりした時には、「自分にしかできないことはなんだろうか」「いつかこの時のことを笑いに変える方法はないだろうか」ともがいていた。ただ、この時間が楽しかった。そしてこれからもきっと、同じように立ち止まって考えるのだろう。確実に言えることは、自分は自分の主人公だからというさだまさしの歌詞のように、自分であり続けながら教師である続けることではない。そのためには研鑽が必要であり、自分探しと自分磨きの旅は続いていくのである。

#### 【参考・引用資料】

- (一) 「令和の日本型学校教育の構築を目指して」中央教育審議会答申 令和3年1月26日
- (二) 「令和の日本型学校教育を担う教師の在り方経過報告」中央教育審議会教員養成部会資料 令和4年6月27日